

音楽の感受に関するスペインと日本の比較研究 (2)
— バルセロナの医療現場における音楽の重要性
「音楽は笑顔になる薬」—

平井 李枝

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第72号 別刷

2022年3月

音楽の感受に関するスペインと日本の比較研究 (2)

— バルセロナの医療現場における音楽の重要性 「音楽は笑顔になる薬」—

Comparative studies on receptivity of music in people of Spain and
Japan Vol.2

— The importance of music in the Hospital in Barcelona
“Music makes patient smile” —

平井 李枝[†]
HIRAI Rie

概要 (Summary)

本論文は、筆者である平井李枝が2019年にスペイン・バルセロナのヴァル・デブロン大学病院で行った実践研究から医療現場における音楽の重要性について論じたものである。「音楽は笑顔になる薬」というテーマのもと、入院患者を笑顔にさせるため病院内で毎週ピアノ演奏を行い、音楽の効果について検証した。本研究の独創性は医療現場の中核である集中治療室等で医師と同格の「音楽の医師」として病棟巡回演奏を行ったことにある。音楽は患者を笑顔にすることができる。表情は連鎖することから、演奏者の演奏姿勢の重要性を明らかにした。またライブパフォーマンスの意義を明らかにした。日本では到底実現不可能な実践研究であるため、医療現場における音楽の重要性を明らかにする意義ある研究であるといえる。

This thesis discusses the importance of music in the medical field. It is based on a practical study conducted by Dr.Rie HIRAI at Vall d’Hebron Hospital Campus Barcelona, Spain in May to December of 2019.

Dr.Rie HIRAI gave concerts every Sunday at the entrance of the hospital.

Also, gaining the trust of the hospital, Dr.Rie HIRAI performed in the ward, especially in the intensive care unit as a Music Doctor.

This is a practical study that cannot be carried out in Japan. Music is a medicine that makes patients smile. I clarified the importance of live music. This is the conclusion.

キーワード： 医療と音楽 スペイン、音楽療法、ピアノ演奏、音楽の感受、音楽鑑賞

1. はじめに

本研究は、筆者がスペイン・バルセロナにおいて、音楽の感受についてスペインと日本の比較を行ったなかから、「医療現場における音楽の重要性」について実践を基に論じるものである。本論文におけるアルファベット表記は基本的に現地の公用語であるカタルーニャ語を使用している。

[†] 宇都宮大学 共同教育学部 (連絡先: rie@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

筆者は2019年5月から12月末までバルセロナに滞在し、Vall d'Hebron Barcelona Hospital Campus（ヴァル・デブロン大学病院）において医療現場の中核で音楽演奏を行い、音楽が入院患者に与える影響について実践研究することができた。

本研究の特殊性は、本来であれば面会謝絶である臓器移植病棟や無菌室、集中治療室や新生児集中治療室などで巡回演奏を行ったことにある。このことを日本に帰国後、医療関係者に報告したところ、そのようなことは日本では考えられないので詳しく知りたいと詳細を求められたため、成果を本論文で発表することにした。日本でも病院のロビーなどでは演奏会は多く開催されているが、病院の医療中核で行うことはあり得ない。先行研究調査でも、このような事例は日本ではこれまで行われていないため、本論文は「医療現場における音楽の重要性」を明らかにする画期的な研究であるといえる。

筆者は2019年12月10日に、医療現場における音楽貢献が評価され、Vall d'Hebron大学病院からディプロマを受賞している。

平井(2021)でも述べたように、筆者は令和1年5月1日～8月25日(117日間)および、令和1年10月1日～12月31日(92日間)の期間、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」宇都宮大学 女性研究者海外派遣制度によりスペイン・バルセロナのBiblioteca de Catalunya(カタルーニャ国立図書館)招聘研究員として「スペイン音楽に関する一次資料の調査」および「音楽の感受に関するスペインと日本の比較研究」を行った。

「音楽の感受に関するスペインと日本の比較研究」では

- ① クラシック音楽における演奏会のアプローチ法に関する実践研究
 - ② 医療現場における音楽の重要性(Vall d'Hebron 大学病院における実践研究)
- の2種類の研究を行った。

- ① のうち、カタルーニャ国立図書館を拠点に行った研究については、本論文の正題(1)として平井(2021)に記述している。本論文は②について記述するものである。

2. 研究の経緯

筆者がバルセロナのカタルーニャ国立図書館を拠点に「クラシック音楽における演奏会のアプローチ法に関する実践研究」を行っていたところ、音楽関係者から医療現場での音楽演奏を依頼された。そして「医療現場における音楽の重要性」について実践的な研究を行うこととなった。具体的には、Dra.Rie HIRAIとしてVall d'Hebron Barcelona Hospital Campus(以下 ヴァル・デブロン大学病院)を拠点に、「音楽は笑顔になる薬」というテーマで、入院患者や外来患者、またその家族等を対象とした演奏会を開催しながら、医療現場における音楽の役割について実践的に研究してほしいということであった。その理由は「Dra.Rieはいつもとても嬉しそうに楽しそうにピアノを演奏するので、それを患者さんにも聴かせてあげたい。きっと笑顔になるはずだ」ということであった。

ヴァル・デブロン大学病院ではマリア・カナルス国際音楽財団所属のピアニストグループが病院の認定を受けて完全無料奉仕のボランティアとして、音楽活動を行っていた。そこに音楽博士である筆



写真1 ディプロマ受賞式にて

者がDra.Rieとして加わるようになった。

当初はヴァル・デブロン大学病院のロビーを中心に行っていた演奏会であったが、さらなる信頼を得て、医療現場の中核で演奏を行うこととなった。こども・女性病院の小児病棟、小児がん専門病棟、周産期医療病棟、臓器移植専門病棟、集中治療室、無菌室などで巡回公演を行うことになった。このように医療現場の中核での演奏を行うということは、日本では到底考えられない。

したがって、本研究の詳細を論文として記述することは、スペインと日本の音楽の感受の比較を明らかにするだけでなく、音楽の持つ役割を明らかにするものであると考える。そこで、本論文では医療現場における音楽の重要性について、ヴァル・デブロン大学病院における演奏活動から論じることとする。本研究は音楽の持つ力を解き明かす意義あるものであると確信している。

3. 研究の方法

研究期間	2019年5月から12月
研究機関	Vall d'Hebron Barcelona Hospital Campus (ヴァル・デブロン大学病院)
所在地	Passeig de la Vall d'Hebron, 119, 08035 Barcelona, Spain
協力機関	Concurs Internacional Maria Canals Barcelona (マリア・カナルス国際音楽財団)
使用楽器	ベーゼンドルファー製グランドピアノ 電子ピアノ 88鍵、72鍵
テーマ	「音楽は笑顔になる薬」

ヴァル・デブロン大学病院はバルセロナ中心部、Plaça Catalunya (カタルーニャ広場) から約10キロの小高い丘の上に所在する病院である。車で約20分、電車の場合、Catalunya 駅から地下鉄L3に乗車し Vall d'Hebron 駅で下車、所要時間は約20分となっている。

同病院の公表データによると専門医師9,000人、年間患者数1,200,000人、建物22棟となっており、最先端の医療技術を誇るバルセロナ屈指の大病院である。

Hospital General (一般病院) の年間外来診療数は907,000件、年間患者数614,000人、年間外科的治療32,000件、成人の臓器移植360件となって。

Hospital Infantil i Hospital de la Dona (こども・女性病院) 年間患者数300,000人、小児臓器移植76件、出生数3,000件となっている。¹

本研究は一般病院とこども・女性病院で行った。

4. 一般病院ロビーでの演奏実践

ヴァル・デブロン大学病院の一般病院の正面玄関入口ロビーにはグランドピアノが設置されていた。ウィーンのベーゼンドルファー社製で、マリア・カナルス音楽財団が管理している。写真2からも明らかのように、ピアノには財団や病院名、企業ロゴなどが貼付されていた。ベーゼンドルファーという高価な楽器が、カラフルなシールでデコレーションされるなど、日本では考えられないことである。

ピアノの設置場所は大理石で建造された吹き抜けで、ピアノの音色が建物に響き渡る設計となっている。このピアノは外来診療時には自由に演奏できるように解放されており、医師や患者などが演奏している。

¹ ヴァル・デブロン大学病院の公式ホームページによる(2021年9月30日最終閲覧)

筆者は毎週日曜日の18時から20時まで、演奏会を開催していた。外来診療終了後であるため、聴衆は主に入院患者とお見舞いに来たその家族であった。ロビーからピアノの音色や歌声が聴こえてくると、続々と人が集まりだし、ピアノの周りに人垣ができた。ここでの演奏曲目は聴衆からのリクエストも多く多種多様であった。



写真2 一般病院ロビーでの演奏風景

4-1 演奏曲目に関する要望

演奏曲目に関する要望は以下の通りであった。

「患者が笑顔になる楽曲」

「患者が元気になる楽曲」

4-2 選曲とその理由

一般病院ロビーでの演奏は、クラシック音楽からポピュラー音楽、映画音楽、日本の楽曲としてアニメソングなど多岐にわたる。クラシック音楽では、筆者の専門分野であるスペインのピアノ曲やラテンアメリカのピアノ曲、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、ショパン、ラフマニノフといったクラシックの名曲などを演奏した。毎週の演奏で、リクエストされるものが次第に固定されていった。

一例として2019年10月6日(日)18:00～20:00の演奏曲目を以下に記載する。

- | | |
|--|-------------------------|
| 1. Enric Granados: <i>Allegro de Concierto</i> | グラナドス作曲《演奏会用アレグロ》 |
| 2. Ernest Lecuona: <i>La Comparsa</i> | レクオーナ作曲《ラ・コンパルサ》 |
| 3. Ernest Lecuona: <i>Malagueña</i> | レクオーナ作曲《マラゲーニャ》 |
| 4. Ernest Nazareth: <i>Odeon</i> | ナザレー作曲《オデオン》 |
| 5. Lopez: <i>Let it go</i> , Frozen | 映画音楽Frozenより《Let it go》 |
| 6. Claud Debussy: <i>Clair de lune</i> | ドビュッシー作曲《月の光》 |
| 7. Franz Liszt: <i>Liebesträum</i> | リスト作曲《愛の夢第3番》 |
| 8. Joseph Lacalle: <i>Amapola</i> | ラカリエ作曲《アマポーラ》 |
| 9. Albaro Carrillo: <i>Sabor a mi</i> | カリーリョ作曲《サボラミ》 |
| 10. Consuelo Velázquez: <i>Bésame Mucho</i> | ベラスケス作曲《ベサメ・ムーチョ》 |
| 11. Pepe Guizar: <i>Sin ti</i> | ギサル作曲《シン・ティ》 |
| 12. Alberto Dominguez: <i>Frenesi</i> | ドミンゲス作曲《フレネシ》 |
| 13. Dra.Rie HIRAI: <i>Breeze of Oranges</i> | 平井李枝作曲 《オレンジの風》 |

1～4、6、7はクラシック音楽、8～12はバルセロナの人々誰もが知っている歌曲、13は筆者の楽曲となっている。8、9はBoleroというラテン音楽のジャンルとなっている。

上記演奏曲目の中で、1～4はクラシック音楽のなかでも、技巧的で「音量の幅が大きい、リズム感がよい、テンポが速い」といった特徴がある。この4曲は初回に一般病院で演奏して以来、アンコールが殺到し、毎回必ず演奏しなければならない楽曲となった。これは筆者にとって最も驚愕した事案であった。

4-3 聴衆の反応

スタッフが撮影した動画によると、入院患者は点滴ポールや車いすなどで現れ、思い思いのスタイルで鑑賞していた。特にリズム感の良いスペイン音楽やラテン音楽の場合は、①楽曲身体を揺らしてリズムをとる②柱や車いす、点滴のポール、自分自身の身体を打楽器の代わりにしてリズムをたたく③立ち上がって点滴ポールとともに踊りだす④家族や周りの人々と共に踊る⑤もう一度聴くために、スマートフォンで動画撮影をするといった姿が記録されている。



写真3 演奏を聴いて元気になった入院患者と

4-4 考察

スペインと日本の明らかな相違点は選曲にある。筆者は日本では病気の人々に聞いていただく音楽として、以下の3点を重要視して選曲していた。「静か・ゆっくり・名曲」。心拍数や血圧に影響がないように、刺激の少ない音楽を選ぶことこそ、入院患者に最適であると考えていた。しかし、ヴァルデブロン大学病院では全く異なっていたのである。特に①はピアニストの演奏技術を最大限に披露する作曲法が用いられており、ダイナミックスの幅の大きさや、速度の速さから、病気の患者には不向きであろうと考えていた。しかし、マリア・カナルス国際音楽財団のマネージャーが「Dra.Rieはスペイン音楽のスペシャリストで博士なのだから、グラナドスの《演奏会用アレグロ》を弾くべきだ。あれは素晴らしい」と力説するので、演奏してみたところ、異常なまでの盛り上がりを見せ、ブラボーと拍手喝さいを浴びたのである。さらには、リサイタルで高評を得たレクオーナ作曲の超絶技巧的楽曲なども、リズム感や疾風のような躍動感からすぐに踊りだすなど、非常に愛好された。

5. こども・女性病院のロビーでの演奏

2019年11月からは、一般病院に設置されていたベーゼンドルファーのグランドピアノがこども・女性病院のロビーに移設された(写真4)。

こども・女性病院は15階建てであり、ガラス張りの0階ロビー待合室にピアノが設置された。

(0階は、日本の1階にあたる)

ここでも一般病院と同様に、毎週日曜日18時から20時までピアノ演奏を行った。

聴衆は主に女性病院の入院患者とその家族、医師や看護師、医療スタッフであった。選曲は前項とほぼ同様であった。



写真4 こども・女性病院ロビーでの演奏風景

一般病院との相違は、こどもの入院患者たちには行動宣言があり、ロビーまで降りることができないことにあった。そこで、11月22日、12月20日に病棟巡回演奏が企画された。

6 こども病院 病棟内での巡回演奏

こども病院では、病棟から移動することのできない入院患者を対象として、一般病棟、集中治療室、腫瘍専門病棟、臓器移植専門病棟、新生児病棟、周産期医療病棟で巡回演奏を行った。

6-1 DIA INTERNACIONAL DE LA MÚSICA

国際音楽の日 ピアノコンサート

11月22日はカタルーニャでは、サンタ・セシリアの日である。キリスト教の聖人 サンタ・セシリア Santa Cecilia が音楽の守護神であることから国際音楽の日として制定されている。

この日は病棟から動くことのできないこどもたちのために、「音楽の医師 Doctora en Música, Dra.Rie」として医師と同格の白衣を着用し、医師らの先導によって病院内を巡回して、演奏を行った。日本では実現不可能であると考えられるため、その詳細を記載することにする。

●巡回方法

電子ピアノ（88鍵盤）と楽器スタンドを手術用カートに乗せ15階建ての病院の地下1階から8階までを巡回した。電子ピアノは医師らが運搬した。

事前に医師らと共に、綿密なミーティングを行い、巡回の順番や患者の病状について情報を共有した。

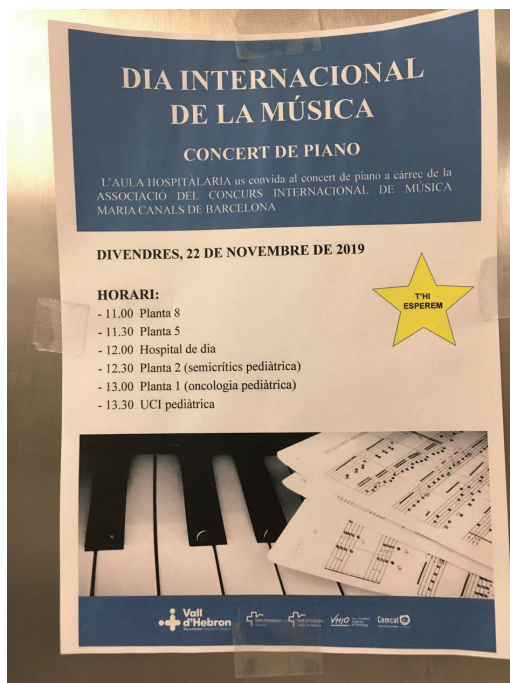


写真5 病院内各所に掲示された「国際音楽の日ピアノコンサート」のポスター
2019年11月22日（金）



写真7 医師らとのミーティングの様子（中央筆者）



写真6 電子ピアノの準備風景

(1) こども一般病棟

こども一般病棟では、各階に設置されている談話室のようなスペースで演奏を行った。写真8では15名ほどのこどもの入院患者とその付き添い、看護師、医療スタッフが聴衆となった。演奏風景は医師が動画で記録している。動画からは、患者が音楽に合わせて、笑顔で手拍子をしたり、リズムをとったり、それぞれが身体を動かしている様子が見られた。

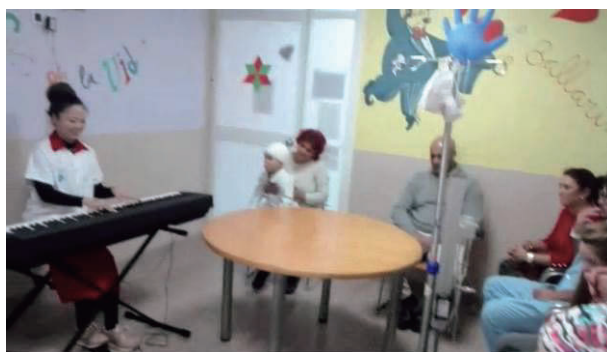


写真8 こども一般病棟での演奏風景

(2) 腫瘍専門病棟

腫瘍専門病棟には、小児がん患者が入院している。各部屋に電子ピアノを運び、個別に演奏を行った。抗がん剤の投与により免疫力が低下している患者のため、医師により電子ピアノが消毒された。嬉しそうに音楽を聴く様子は、病院の公式SNSなどでも紹介された。

(3) 集中治療室

集中治療室では、モニターにつながれた患者と車いすの患者のための演奏を行った。ここでは医師のリクエストにより、日本アニメから「ドラえものの主題歌(初代)」「となりのトトロ」なども演奏した。

医師やマリア・カナルス音楽財団のスタッフによる動画には、ベッドから起き上がって、身を乗り出して「ドラえもん」主題曲をカタルーニャ語で大きな声で歌う姿や、笑顔で手拍子をする姿が記録されている。



写真9 集中治療室での演奏風景

(4) 臓器移植専門病棟

集中治療室よりもさらに厳重な感染対策が必要な臓器移植専門病棟では、ガラス越しに演奏を行った。その際、各部屋の前に備え付けられている電話を用いて演奏を届けた。ここで求められた楽曲も元気が出て、楽しいものとのことであり、レクオーナ作曲の《ラ・コンパルサ》、《アマポーラ》、《Sabor a mi》をリクエストされた。さらに、演奏者が日本のピアニストとのことで、前述と同様にアニメソングやゲーム音楽なども求められた。スタッフが撮影した動画には、患者がガラスに接近し、目を輝かせ身を乗り出して体を動かしたり、手拍子をしたりと一様に笑顔で嬉しそうなが記録されている。医師らによると、普段はあまり笑わないこどもたちがとても喜んで笑顔になっているとのことであった。

(5) UCI周産期医療病棟

UCI周産期医療病棟では各病室の前で演奏を行った。ここではリズム感の良い楽曲のほか、リクエストによりカタルーニャ民謡や日本のアニメソングなどを演奏した。さらに新生児がリラックスできるようなゆったりした曲も演奏した。

医師が撮影した動画には、母子同室の患者がこどもをあやしながら踊る様子が記録されている。

(6) 外来病棟

国際音楽の日、最後の演奏は外来病棟のPARC D' ATENCIONSで行った。この場所はロビーとつながっており、入院患者、外来患者、付き添いや面会者、さらに医師や医療スタッフなど多くの聴衆が来場した。

ここでもグラナドスやレクオーナの楽曲、またAmapolaをはじめとするスペインで著名なポピュラー音楽を演奏した。

スタッフが撮影した動画には、演奏に合わせて腰を振ったり手拍子をしたり、踊ったり、笑顔で楽しそうに聴いている様子が記録されている。



写真10 UCI周産期医療病棟での演奏風景

院内巡回演奏が終わった後は、ミーティングルームにて、今回の演奏に対する患者の反応を医師や医療スタッフから報告を受けた。つらい病状に普段笑顔を見せることのない患者に笑顔が戻って本当に良かったとのことであった。そのため、クリスマスにもう一度院内巡回演奏を実施することとなった。



写真11 外来病棟での演奏 (中央筆者、右側撮影する医師たち)

6-2 Concerts de Nadales クリスマス病棟巡回演奏

Concerts de Nadales (クリスマスコンサート) はこども病院における Tallers i activitat de Nadal (クリスマスのワークショップと活動) の一環として12月20日に行われた(写真12)。

日本のクリスマスの概念とカタルーニャのクリスマスは全く異なっているため、ここで説明することにする。

・カタルーニャのクリスマス文化

カタルーニャではクリスマスはNadalと呼び、1月6日までがクリスマスシーズンとなっている。町はイルミネーションであふれ、クリスマスバザールも各所で開催される。12月24日～26日は家族や親戚が集まって飲んだり食べたり歌ったりと楽しく過ごすことになっている。

クリスマス料理としては、「Escdilla エスクディーリャ」と呼ばれる豚の血でできたソーセージと野菜を煮て、貝殻のような形の pasta を入れたスープ(写真13)や、「Turrón トゥロン」と呼ばれるナッツやチョコレートで固めた甘いお菓子が伝統となっている。

・三人の王とサンタクロース

キリスト教のカトリック信仰が根付いており、最も重要なのが東方三博士(賢者)である。カタルーニャの人々は三博士を「三人の王」としており、彼らがキリストの誕生を祝うためにラクダに乗って出かける一部始終を、「Pasebre パセブラ」と呼ばれるジオラマで再現する習わしがある(写真14)。このパセブラは各家庭で飾るものであり、市役所など公共施設でも展示される。カタルーニャのこどもたちにとって、Pare Noels サンタクロースはプレゼントを運んでくる存在ではなく、外国(フィンランド)から来た宣伝マンだと思っている。そもそもカタルーニャはピレネー山脈以外全く雪が降らないので、トナカイやソリなどは無縁なのである。



写真12 クリスマス行事のポスター
20がコンサート



写真13 伝統料理エスクディーリャ



写真14 一般家庭に飾られたパセブラ

そのようなわけで、こどもたちにプレゼントを届けるのは、1月6日の未明にラクダに乗ってやってくる3人の王となっている。良い子には3人の王が素敵なプレゼントを、悪い子には灰か炭を持ってくるといった言い伝えがあり、1月6日までこどもたちは良い子に過ごすのである。1月6日には各地で3人の王にまつわるミュージカルや演劇などが上演される。

・クリスマスの人形「カガ・ティオ」と「カガネイ」

さらにカタルーニャにはクリスマスに欠かせない2つの人形がある。「Caga Tíoカガ・ティオ」と「Caganerカガネイ」である。

「カガ・ティオ」は赤い帽子をかぶった丸太でできたおじさんの人形で、彼には毛布がかぶせてある。直訳すると「うんこおじさん」である(写真15)。

こどもたちは12月から毎日「カガ・ティオ」におやつをあげると、キリスト生誕の日に「カガ・ティオ」の歌を歌いながら、棒で「カガ・ティオ」をたたいて、毛布をめくると、その中にたくさんのお菓子が入っているという風習がある。

「カガネイ」もクリスマスに欠かせないカタルーニャの伝統的な人形である。野外で排便する様子を模したこの人形はバルセロナ各所に飾られており、民話絵本なども書店で販売されている。さらには政治家や有名アーティストの姿でも制作され、販売されている。

詳細は写真16を参照してほしい。これはレストランに飾られていた。良い排便こそが健康の証であるとして、カガネイは幸運や繁栄、豊穡の象徴人形となっている。

12月に入るとカテドラル広場などに、クリスマスバザールが出現し「カガ・ティオ」や「カガネイ」の専門店がたくさん出店される。



写真15 ナースステーションに飾られた「カガ・ティオ」



写真16 レストランに展示されている「カガネイ」

6-2-1 クリスマスコンサートでの演奏曲

10時30分から13時まで、院内巡回演奏を行った。同日12時にはDescens vertical de Pares Noels (Pare Noelsの垂直降下)として、病院の最上階からロープでPares Noels (サンタクロース)が降下するというアクロバティックな恒例行事が行われた。

聴衆には写真17の歌詞集が無料配布された。

掲載曲は以下の通りである。

Nadales	
1.	LES DOTZE VAN TOCANT
2.	Fum, Fum, Fum
3.	Campana sobre Campana
4.	Jingle bells
5.	El noi de la mare
6.	Santa nit
7.	HACIA BELÉN VA UNA BURRA
8.	LOS PECES EN EL RÍO
9.	BLANC NADAL
10.	La Marimorena
11.	Quan Somrius

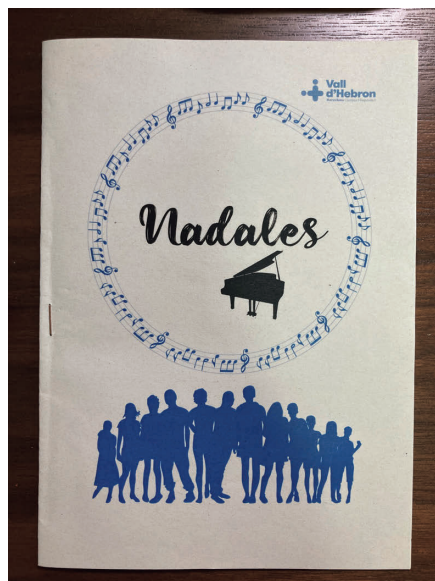


写真17 配付された歌詞集

掲載曲目はカタルーニャの伝統的なNadal (クリスマス)の歌曲である。6 Santa nitは《きよしこの夜》、9 BLANC NADALはアーヴィング・バーリン作曲の《ホワイトクリスマス》である。

この他に、クラシック音楽、映画音楽、日本のアニメソングなどを演奏した。

また前項で述べた「カガ・ティオ」の歌やバルセロナのサッカーチームの歌、歌詞集に掲載されないEl Desembre congelatなどクリスマスの歌なども選曲に加えた。

この日は病院内のすべてのスタッフ、医師ら医療スタッフも赤い帽子やカチューシャ、キラキラしたモールなどで白衣の上を飾り、病院全体が賑やかな雰囲気であふれ、テレビ局や新聞社等マスコミも取材に訪れていた。

この日の院内巡回演奏は主に腫瘍専門病棟、集中治療室、UCI周産期医療病棟で行われた。また外来病棟では医療スタッフ総出による大合唱等も行われた。

院内巡回の方法は前述の「国際音楽の日」と同様であるため、省略し、以下に腫瘍専門病棟での演奏、高度な感染症対策が必要な病室における演奏、外来病棟での演奏の3項目を記載することにする。

(1) 腫瘍専門病棟

小児がんで入院している患者を個別に訪問し、クリスマスの楽曲を演奏した。また医師からの依頼により、ジングルベルの演奏体験なども行った。日常生活から隔離されている環境の患者が、嬉しそうにキーボードを演奏する様子が記録されている。



写真18 キーボードを弾くこどもの入院患者

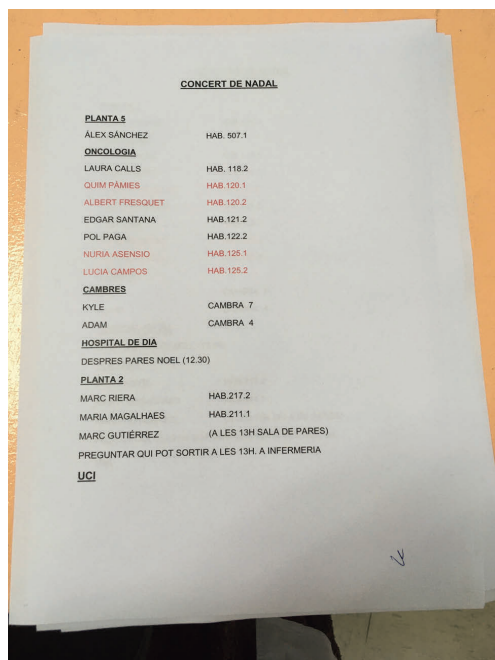


写真19 巡回演奏のスケジュール表

(2) 高度な感染症対策が必要な病室での演奏

免疫力が著しく低下しているこどもの集中治療室では、白衣の上に手術衣を着用し、マスク、キャップ、手術用の手袋をはめて演奏を行った。ヴァル・デブロン大学病院においてマスクを使用したのは、この特殊な環境のみであった。楽器は医師らによって念入りに消毒された。

このような装束による演奏は初めてであり、滑りの悪い手術用手袋を着用して電子ピアノを演奏する難しさに直面した。しかし、演奏方法を工夫することでこの難局を乗り切ることができた。

手術用手袋で演奏する際の奏法について試行錯誤の結果、以下のような結論を得ることができた。

手術用手袋は、メスなどの医療機器がすべらないように製造されている。しかしピアノ演奏は鍵盤の上を指を滑らせることで、スムーズな演奏を可能としている。そこで医療用手袋を着用する際には、鍵盤を滑らせる奏法は使用せず、指をなるべく鍵盤から垂直に上げ下げすることが重要である。そのためにはオクターブを多用しないことも重要である。

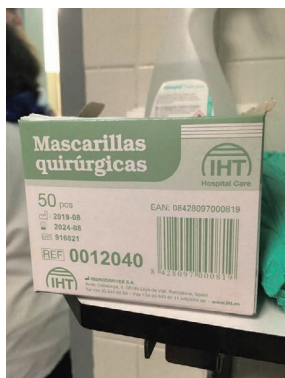


写真21 医療用マスクの箱



写真20 感染症対策の準備風景

ここでもクリスマスの楽曲を演奏し、日本アニメファンである患者からのリクエストにより、「ドラえもん」のテーマなどを演奏することになった。医師が撮影した動画には、重病に苦しむ患者ではあるが、音楽に合わせて体を動かし、ベッドをたたいて嬉しそうな様子に付き添いの家族も涙を流して喜んでいる様子が記録されている。そしてそれらの動画はSNSなどに即座にアップロードされた。

(3) HOSPITAL DE DIA 外来病棟での演奏

外来病棟では、医師の合唱や打楽器演奏、ダンスも加わった。歌詞集に掲載された楽曲を順番に一緒に歌唱し、聴衆も加わって大合唱となった。打楽器はタンバリン、トライアングル、マラカス、鈴といったこどもでも簡単に演奏できる楽器が使用されていた。

演奏楽曲のなかで、La Morimoreraはメキシコ発祥の民謡とされているが、スペインとメキシコの関係は深く、カタルーニャの人々誰もが歌えるクリスマスの楽曲となっている。2拍子の軽快なリズムと調子のよい歌詞に特徴がある。演奏に合わせて医師や医療スタッフが電車のように連なって、前の人の肩につかまって踊った。さらに外来患者やその家族も加わり、は長く引き伸ばされ、大変にぎやかに行われた。演奏者の笑顔と医療スタッフの笑顔、聴衆の笑顔が公式動画に記録されている。



写真22 医師たちとの協演



写真23 医師たちとの記念撮影(後ろの非常階段上の方に映っているのは垂直降下中のサンタクロース)

7. 入院患者からの手紙

クリスマスコンサートが終了し、新年に差し掛かったころ、こども病院の入院患者から一通の手紙が届いた。以下に原文と翻訳を掲載することにする。

Pels músics de part de l'Aina
Vall d'Hebron

Hola, soc l'Aina!
Moltes gracies per
acompanyar-me amb la
música en la meva estada
a l'hospital.
Amb la música tot és
més fàcil.
Bon Nadal i jelia any nou!
Que la música us acompanyi!!

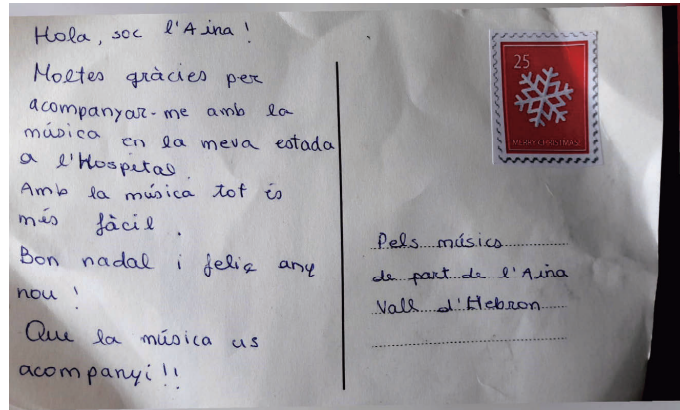


写真24 こども病院入院患者からのお礼の葉書

ヴァル・デブロンのアイナのところに来てくれた音楽家さんへ

こんにちは。私はアイナです！

入院中の私に、音楽を運んで来てくれて、一緒に過ごしてくれて、本当にありがとうございました。音楽があれば、すべてが楽になります。

メリークリスマス、そしてハッピーニューイヤー！

音楽がいつもあなたと一緒にありますように！

(平井 訳)

8. 結論

思いがけない縁から始まった本研究ではあったが、日本では到底実現できない体験であり、意義あるものであった。「音楽は笑顔になる薬」というテーマのもとで行った演奏実践から以下のような結論を得た。

音楽は人々に元気をもたらす力を持っている。病院での演奏、静かな曲や心が落ち着く曲が求められているものと考えていたが、本研究での実践では、賑やかで、テンポが速くリズム感の良い楽曲が好まれた。これはスペインという国や民族性、彼らが育ってきた社会的背景に起因するものであると考える。平井(2021)で述べたように、バルセロナには音楽に寛容な環境が整っている。町中に音楽が溢れ、音が聞こえるとすぐ踊りだす彼らにとっては、快活で明るい雰囲気のある楽曲のほうが元気が出るということである。

そして本研究で最も重要であると言えるのが、ライブパフォーマンスの意義である。入院患者は行動制限され、ストレスの溜まる日々を送っているはずである。そこへ音楽を提供する場合、そして何よりも大切な事は、演奏者がどのような表情で演奏しているかということである。笑顔でのパフォーマンスこそが最も重要であると言う結論を得た。楽しそう、うれしそう、元気が良いといった演奏者

の様子を見て、患者も思わず手拍子をしたり、歌い出したり、車椅子から立ち上がって踊り出したりと言うことが多々あった。医師から、「難解な楽曲を、さも大変そうに演奏する姿を見た患者が悲壮感漂う表情に共感して寝込んでしまった」という証言があった。

人の感情は連鎖することが多く、ポジティブな感情の連鎖は、病気の人々を元気にする力を持っている。したがって演奏者が楽しく笑顔で演奏す音楽には「音楽は笑顔になる薬」という効果がある。これは、前掲の入院患者「アイナの手紙」のに記されていた「音楽があればすべてが楽になる」という言葉からも明らかである。

CDや放送といった音楽の鑑賞ではなく、目の前で演奏者が演奏するという事が、いかに重要であるかということを示唆している。そしてその演奏者の演奏姿勢こそが患者たちに良い影響を与えるということが明らかになった人の表情と言うのは連鎖するものであり感情も同じく連鎖すると言うことを表している。ポジティブな感情こそが、病に苦しむの人々を笑顔にし、前向きに、元気にするのである。「音楽は笑顔になる薬」これこそがライブ音楽の価値ではないだろうか。

病気は薬で治るが、人々の心は音楽で直すことができる。病を最も早く治す手段は、音楽で人々を笑顔にすることであると言う事が本研究によって結論付けられた。

演奏者の演奏姿勢によって、音楽の感受は変化するため、笑顔で演奏することが重要である。これは筆者がこれまでの音楽鑑賞教育法で提唱してきたアプローチ法そのものであり、それが医療現場においても有効であることが証明されたことになる。

日本でも病院でのロビーコンサートは数多く行われているが、真に必要なのは、ロビーに行くことができない入院患者なのではないだろうか。

コロナ禍で音楽業界は不況にあえいでいるが、本論文のような事例をもとに、社会に役立つ音楽として、その魅力や効能を発揮していけば、おのずとその価値は高まっていくものと考ええる。

筆者は2020年1月1日にバルセロナから帰国した。その後、2020年3月世界的な新型コロナウイルスの蔓延によって、海外との往来が規制されただけでなく、バルセロナはロックダウンなど厳しい行動宣言が課せられた。家族すら面会できなくなったヴァル・デブロン大学病院には、孤立しストレスをかかえる患者が多数いるため、マリア・カナルス音楽財団を通して定期的にピアノ演奏の動画を送るなど、現在もバルセロナの医療現場への音楽貢献を継続している。

今後はこのような経験を海外だけでなく、日本でも役立てられるよう、方策を考察したい。



写真25 医師、医療スタッフたちとの記念撮影

参考文献

ヴァル・デブロン大学病院公式ホームページ <https://www.vallhebron.com/ca/el-campus/>

ヴァル・デブロン大学病院公式Instagram

Solá, Enric Solsona (2004) *Nadales, Veu i Piano*, Casa Beethoven Publications, Barcelona.

Vidal, Francesc Vincens (2016) *Cançons per ensenyar i aprendre*, Barcelona: Rafael Dalmau, Editor.

Puig, Alberto; Padilla, Roger (2013) *El Caçoner de Tothom*, Barcelona : Bonal·letra Alcompàs.

平井李枝 (2021) 音楽の感受に関するスペインと日本の比較研究 (1) —Biblioteca de Catalunya主催による演奏会の分析から—, 宇都宮大学共同教育学部研究紀要. 第1部, pp.213 – 236.

謝辞

スペインではRieという名前が「声に出して笑う」という意味を持ちます。患者を笑顔にする Dra. Rieとして活動できたことはとても貴重な体験でした。本研究に関わってくださったヴァル・デブロン大学病院の医師、看護師、理学療法士、コーディネーター、医療スタッフ、入院患者やご家族の皆様、マリア・カナルス国際音楽財団のマネージャー、ピアニストグループの皆様に心より感謝申し上げます。また2008年から私の研究に協力し、2019年の滞在中にカタルーニャの様々な文化を体験させてくださったBiblioteca de Caralunya 音楽部門長のRosa Montalt氏とご家族、親戚の皆様に心より感謝申し上げます。

(注) 本論文に掲載している全ての写真は、ヴァル・デブロン病院及び関係者からSNS等をはじめとする広報手段に掲載し、広く発信する目的で提供されたもので、許諾済みです。

令和3年10月1日受理

Comparative studies on receptivity of music in
people of Spain and Japan Vol.2
— The importance of music in the Hospital in
Barcelona “Music makes patient smile” —

HIRAI Rie